

いつか羽ばたくための

モノローグ

4

鈴野しずね

数日前の、とりとめも無い事を考えているようないないようなそんなひととき、ふと頭の中に黒いペンで描かれたような絵が浮かんでいることに気がついた。

それは見覚えある図。

いったいどこで見たんだっけ？

あれこれ考えた。

最近絵本なんて見てないし、どの本に載っていたんだっけ??

やがて思い出した。

「マンゴーのいた場所」 ウェンディ・マス 金の星社

活字が大きくて、漢字にふりがながふってあるこの本は、子供向きの小説らしかった。

共感覚を調べていたら、この本が出てきたので、2週間ほど前に読んでみたのだった。

本編が始まる前の解説みたいな部分に、かわいい小さなイラストがいくつか載っていた。

ページをパラパラめくって挿絵を探した。

だが、私の頭に浮かんでいた丸々1ページを割いたような挿絵は、この本のどこにも無かった。

そういえば、これを読んでいる間中ずっと、次から次へとストーリーに沿った映像のような絵のようなものが、頭の中に浮かび続けていた。

共感覚者である主人公の少女ミアの、共感覚体験の描写部分は特に強烈だった。

私の頭の中に沢山の色や形が飛び交い、うねうねとしあるいはふわふわと、本の描写どおり（たぶん自分的には）に、映像が再現されていった。

そのあまりの賑やかさ活発さに、読みながら私はとても戸惑い、でもその感覚を無意識に楽しんでいたのでした。

本の挿絵だと思ったものは、自分が、無意識のうちに頭の中で作り出したものだったのだ。

もしかしてこれも共感覚なのか???

恐る恐る他人に尋ねてみた。

小説やエッセイを読んでいる時、その描写が頭の中に映像みたいなもので再現されているのかどうかを。

答えはNOだった。

自分から意識的積極的にやろうとしなければ、そんなことはできない、と。

音楽を聴いている時も、それは同じだと。

、、まだあったのか、、

私は音楽以外にも反応していたのか、、、、

そろそろ観念しなければならぬようだった。

モウ、悪あがきしてもダメだって、サ

ヤッパリ 共感覚 持ッテル ラシイ.....

揺れ動く心は

信じたくなくても、観念したくなくても、
いつかは受け入れなければならない事実
私の心は揺れ動き、千々に乱れる。

「夜」

心の中で 魑魅魍魎がのたうっている時は

夜明けなんて来なくていいのに と思う

妖怪の姿なんか見たくない

確認なんかしたくないから

世の中の 森羅万象がきらめいている時は

夕暮れなんて来なくていいのに と思う

目に映るあらゆるきらめきを見ていたい

その全てを 心にインポートしたいから

「マンゴーのいた場所」 ウェンディ・マス 金の星社

マンゴーというのは、主人公の女の子ミアが飼っている猫の名前。

ミアにとって、マンゴーののどを鳴らす音や鳴き声は、いろいろな色合いのオレンジ色に見える。

それがマンゴーの色そっくりで、こういう名前になった。

この物語の後半、いなくなったマンゴーをミアが探す場面がある。

ミアには、マンゴーが歩いたところがオレンジ色の光のすじとなって見えていて、それをたどって行ってマンゴーを見つけた。

その描写に私の中では、光のすじはオレンジ色ではなく枇杷色に変わっていった。

「びわ」ではなく「ピワ」でもなく、漢字の「枇杷」色に。

なぜそうなったのか、自分では全くわからない。

大体「枇杷」なんて漢字、自分では正確に書けない。

果物であるびわが好きなのでもない。

というか、びわなんて大人になってから食べたことあったんだろうか？というくらい無関心な食べ物にすぎなかった。

でもその描写を読んだ時、頭の中に「枇杷色」という漢字と、その色、質感が出てきてしまったのだ。

マンゴーのオレンジ色や質感と、枇杷のオレンジ色と質感は、私の中ではたぶん違うのだろうけど、どう違うかは説明できない、自分でもよくわからない。

ただ、頭に浮かぶその光のすじを、綺麗！って感じるのは変わっていない。

「銀河鉄道の夜」 宮沢賢治

ここまできたら宮沢賢治のものも読まざるを得ないだろう、そんな感じで手に取った。

宮沢賢治は共感覚を持っていたのかもしれない、というのを何かで読んだから。

真偽のほどは定かではないが。

この人のどこに共感覚が？と、それを強く意識し探るようにして読んだので、すぐに疲れてしまった。

なので途中からはもうそんなことはやめて、普通に読んでいった。

文学作品を、そんなやましい目で読んじゃいかんね。

私の頭の中では最初から最後まで、抽象的具体的な絵あるいは映像が流れ続けていた。

車窓から見える光景、カムパネルラが落ちたらしい川と橋の様子、橋の材質、形、たくさんの人のシルエットなどの光景が、読みながら頭の中に勝手に再現されていった。

この作品に共感覚と言われる描写があるのかどうか、結局私には全くわからなかった。

私は今までも文章を読んでいると、映像のようなものが浮かんでいたのだろうか？

あれこれ考えてみた。

そういえばエッセイは好きだけど、小説は特に好んで読んだりしてこなかったな。

私は、読むスピードは速い。

でもそれは単なる「斜め読み」なので、読んだ内容を正確に理解しているということではない。

なので見落としがけっこうあって、小説の場合、「あれ？どこにそんなシーンがあったっけ？

」と、ページをさかのぼって見落とし部分を探し出すという作業を何回もすることになる。

エッセイだと、ストーリーがあるわけではないので見落としがあっても、私にとってはそれほど支障はない。

さかのぼって見落とし部分を探すのも、そんなにページ数がないから小説よりは簡単だし。

だから私は、エッセイのほうに興味が行くのだろうか？

私は小説が苦手なのか？

う〜ん、、、どうなんだろう???

斜め読みをやめればいいだけのことなんだけど。

そこまで考えて、ある本のことを思い出した。

それはずいぶん前のことだった。

その頃は小説もけっこう読んでいた、海外のスパイものだけだったけど。

もちろん斜め読みで。

そんな頃、日本人作家のいわゆる純文学の本を手にした。

けっこう分厚い本だった。

数ページほど読んだ。

そして、これはちゃんと読もうと思ったのだった。

その本に出てくる描写がとても美しく、斜め読みではなく丁寧に読んでいこうと思ったのだ。

そうしたら、毎日数ページずつしか読み進めなくなった。

そしてその本は、とうとう読了されることはなかった。

内容が、つまらなかったわけではない。

あの時読みながら、私の中には映像が流れていたのだ、たぶん。

その映像がとても綺麗だったから、先へ進めなくなってしまったのだ。

「マンゴーのいた場所」を読んでいる時も、「銀河鉄道の夜」を読んでいる時もそうだった。

自分の中に流れる映像みたいなものが、心惹かれる美しいものであればあるほど、ずっとそこに留まっていたくなるのだ。

その世界の中で、ずっと遊んでいたくなってしまうのだ。

そういう状態になると、もはやストーリーなどどうでもよくなってしまうのかもしれない。

音楽でたとえるなら、10曲も入っているアルバムなのに、その中の1曲だけをずっとリピートして聴いているのと私の中では同じ行為なのだ。

そっか、だから「斜め読み」になってしまうのかあ。

自分の中の映像に捕まらずにちゃんと読了するための方法は、頭の中に映像を再現できないほど

粗く大雑把な「斜め読み」という力技で、強引に読み進む以外はないのだ、私には。
それは、昔から文章に、無意識に映像を感じていたからなのかもしれない。

なるほどね、そういうことか、そうだったのか、
私ってそういう人間だったのかあ、
ふう～ん、ふう～ん、、、、

千々に乱れる心は

「朝」

改札を足早に通り抜け 階段を下る

ホームのごみ箱に

いらない思いを 千切って捨てたら

朝の顔になって 列に並ぶ

きょうを始める

高校生の時、現国の試験か宿題で、詩の内容を解説しろ（うろ覚え）という問題が出た。

その詩を読んだ時、今考えると確かに、自分の中では景色を感じていた。

それは自分の学校のプール。

夜更け、渡り廊下から見た照明か月明かりに照らされている水面、そしてそのさらっとひんやりした水の手触りを感じたのだった。

手のひらのくぼみで揺れるそれは、まるで銀のスプーンですくい取った透明でひんやりとしたゼリーのようなようでもあった。

実際にはプールに照明なんてないし、夜更けに行ったこともない。

そしてその詩に出てくるのはプールではなく、海なのである。

「海」という単語は使われていないけれど、よく読むとそこに書いてあるのは明らかに海の情景なのだった。

でも自分の中に勝手に出てきてしまったイメージは消すことができず、というかプールの淡水のイメージのほうが自分的には気持ち良かったので、訂正できなかった。

答えをどう書こうか迷ったけれど、「詩なんだからどう解釈してもいいじゃん」というむりやりな屁理屈をつけ、プールの情景を書いてしまった。

詩の作者からしたら、私ってチョー自己中な読者ということになるんだろうな。

ある曲の歌詞に、「レトリバー」という単語が出てくる。

この曲を初めて聴いた時、私の中ではこの単語は完全に無視された。

頭の中に出てきてしまったのは、小さい頃に遊んでくれた、レトリバーではない別の犬種の犬だった。

作詞家にしたら、やっぱり困っちゃう聴き手になるのかもなあ。

ふう～むむう、

つまり、自分が目にした文章から頭に勝手に浮かんでくるイメージや映像って、必ずしもその文章を正確に表現したものじゃないってことかあ。

むしろデタラメなものの方が多いのかも知れない。

つ、使えね——、、、、。

音楽

「イメージ雑感」

音の言葉をひとつずつ さざ波立つ水面に 浮かべてみる
深く透明な湖に ゆっくり浮かべていく

岩清水

灰色に銀のさし色

夕暮れの空のグラデーション

古都の石段

和傘にかかる雨

竹林

仏像の微笑

朝露まとった苔

もの哀しさ

夕焼けを織り込んだ錦

かすかな笙の音

鳳凰

やがて

天女の羽衣と 天使の羽根が 空からゆっくり舞い落ちてきて
この湖が 音楽の絵になる

これはあるインスト曲を聴いた時の私の感想、曲のイメージ。

音楽を聴くと、心の中にいろいろな色や形、映像みたいなものが浮かんでくる。

これが私。

やっぱりこれが私。

いつか羽ばたくためのモノログ 4

<http://p.booklog.jp/book/22307>

著者：鈴野しずね

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/shizushizu/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/22307>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/22307>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.